

三 翠 化 学

(題字は稲川先生)

第 18 号
 昭和 58 年 3 月 31 日 発行
 三 翠 化 学 会
 津 市 上 浜 町 1 5 1 5 内
 三 重 大 学 農 芸 化 学 科
 電 話 / 津 (0592) 32-1211
 振 替 / 名 古 屋 9-593
 印 刷 / 株 式 会 社 有 限

老師、新卒ともに新たな道へ



北岸 奈良両先生は本年の四月一日付で定年退職された。北岸先生は昭和三十九年から十九年の間、土壌学・肥料学講座の教授として、奈良先生は昭和二十七年から農産製造学講座の助教授として三十一年の永きにわたる。私共を御指導いただきました。私共は御指導いただきました。私共は御指導いただきました。

日本経済の高度成長が始まり環境問題にも識者の関心が注がれ始めた昭和三十三年のことから。公害立法第一号の水質保全法制定を契機として農林省に水質汚濁に関する共同研究が設定され、農技研の私の研究室も動員されて「重金属による水稲の被害に関する基礎研究」を担当することになりました。これが重金属問題に私が巻きこまれたそもそものいきさつです。御

北岸、奈良両先生は本年の四月一日付で定年退職された。北岸先生は昭和三十九年から十九年の間、土壌学・肥料学講座の教授として、奈良先生は昭和二十七年から農産製造学講座の助教授として三十一年の永きにわたる。私共を御指導いただきました。私共は御指導いただきました。私共は御指導いただきました。

です。草地農業の調査で三十三年にニュージランドに行つた際、開発途上の原子吸光に接する機会がありました。原子吸光はオーストラリアの Massey が開発したもので、それで帰国後、発光分光分析に携わりながら原子吸光の発展には鋭い関心をもつて見守っていました。三十七年に一度兼用型のものが日立と島津から売り出されたのですが、これはあまり有用なものではありませんでした。ところが三十九年になってかなり優秀な専用機が、米から輸入され始め、工学や医学の分野で関心をもち始めました。早速文部省の科学研究費の機関研究で申請したところ、幸運にも一回で

承知の通り、わが国の環境行政が本格的に動き出すのはこれから十年も後のこと、四十六年に環境庁が発足してからのことですが、時代を先取りしたこの法律の制定を農林省幹部はかなり重要視したようです。当時としては破格の予算をつけてこの共同研究を推進し将来に備えさせた。分光光度計がようやく普及し、吸光度法で微量重金属の定量が何とか可能になったのは私とは縁が深かったように思われます。

私が農学部に移りましてから三十有年がすぎ、いまさらながら月日のたつのは早いものだと感じて居る今です。しかし考えてみますと、三重大学に来て教育や研究にたずさわることになりましたのは不思議な縁によるものかと思つて居ます。私は関東育ちですので、京都で勉強した後はいずれ東へと思つており、卒業と同時に明治製糖へ入社したのですが、敗戦で本社が台湾の会社はどうするか目鼻がつかず、それで京都へ戻つたのですが、これとて次の就職までの一時しのぎ、教師になろうなどとは思つてもみず、またそれほどの自負もありませんでした。大学という所は常々ぬるま湯の様な所で、入ると出る

です。草地農業の調査で三十三年にニュージランドに行つた際、開発途上の原子吸光に接する機会がありました。原子吸光はオーストラリアの Massey が開発したもので、それで帰国後、発光分光分析に携わりながら原子吸光の発展には鋭い関心をもつて見守っていました。三十七年に一度兼用型のものが日立と島津から売り出されたのですが、これはあまり有用なものではありませんでした。ところが三十九年になってかなり優秀な専用機が、米から輸入され始め、工学や医学の分野で関心をもち始めました。早速文部省の科学研究費の機関研究で申請したところ、幸運にも一回で

という厳しい制約がありました。小さい特色のあるものをとるので、堀口君と手分けしてあちこち相談に飛び廻り、東北の農学研究所まで行ったと記憶しています。建設にかなりのエネルギーを注ぎましたが、後になって重金属の研究にともなう原子吸光とやらで有力な武器となり、報いられた。結局、三重大学に来てからの私の研究は、原子吸光と R-1 技を中核として、植物体内における重金属の微細分布や化学形態別分別定量を狙った分析体系を組立てることから始まったわけだ。最近分析化学の分野で「trace characterization」ということが脚光を浴びて参りましたが、いふなれば植物栄養

私の分野における trace characterization の一つの試みであつたといえるでしょう。丁度この頃からカドミウム土壌汚染問題が表面化するとともに、銅とカドミウムの土壌汚染の性格の差が明らかになってきた。水稲に対する毒性では銅とカドミウムは等しいのに、カドミウムでは玄米収量にひびかぬレベルでも汚染米。これを主食として摂取する国民が健康を損ねるおそれのある米が生産されるという側面が浮かび上がってきたのでした。そこで正常なレベルの亜鉛—必須元素で、電子配置がカドミウムと相似し、減収などに汚染米を生産するような低レベルのカドミウムを対比させ、前述のと存じます。

私どもの三翠化学会は今年で設立十周年を迎えます。そこで、これを記念して、盛大な総会と祝賀パーティーをもちたいと思つて居ます。当日は、昭和五十八年度定期総会を母体三重大学農学部の大講義室で開催し、引き続き同じ場所、三重県支部の支部設立総会を開催します。祝賀パーティーは、二つの総会終了後、場所を市内に移し、盛大に祝いたいと思つて居ます。この席で、昨秋、叙勲の栄に浴せられた北岸、奈良両先生と、ご定年を迎えられた北岸先生、奈良先生に、皆でお祝いの言葉を申し上げます。樹をいたします。

になりました。学生諸君にとっても本学に学ぶようになったこと、それはそれなり理由があつたことではあつたが、考えてみれば不思議な縁としか言ひようはないと思つて居ます。専門学校が大学に昇格し、大学教官になったことは、また研究の励みになったと思つて居ます。大学教官である以上研究は本務以上であり、学位もまた当然と考えられ、教授の資格の条件とも考えられて居ますが、当時としては学位はなかなか高嶺の花といつたところでした。今は昔の若手教官もそれぞれ励

らの内容は二月二日の定年退職記念講義で話をいたしました。その頃本学に講師として、殿粉の泰斗の二国先生が阪大からみえられていたことが縁となり、殿粉の研究に打ち込むようになった訳です。しかし殿粉は今日でもそうですが、判つてい

るようでは判つていないことが多く、それだけまた研究に興味を湧くのですが、たちまち研究に行きつまずり、殿粉の研究は泥沼のようだと云われるように二進も三進も行かぬのを、経験したもので、順調な研究のうちに、十年ほどは暗中模索の時をすごし、どうしようかと悩み続けました。この頃はまた他の研究者も殿粉をはなれ、酵素の研究やその他の研究に移つていったのです。私はせつなく殿粉の研究に入ったのだからと試行錯誤の研究を続けたのです。殿粉の研究が少なくなったことで私の研究も他人に越えられる心配もなくじつくり落ち着いて研究をすることもできた逆の利点にもなつたかと思つて居ますが、一つの発想から研究の道が開けた。誰れでも人はこの様な時があるものですが、私の場合は今までの研究との結びつきもでき

思つてもみなかった殿粉学会賞に思われ、まことに幸運であつたと思つて居ますが、これも一つの縁であつたと思つて居ます。卒業生諸君もこの三重卒業業という縁で、多くの人々の知遇をえられたことも多いと思つて居ますが、世間は広いようで狭いものでもあります。縁は十分に大切にしたいものかと思つて居ます。私もこの四月一日に大学を去りますが、無事に定年を迎えられますのは多くの人の縁によるものかと深く感謝して居ます。幸にも健康に恵まれていますのでこれからは縁をえた殿粉やそれに関連した食品に関する研究を整理し、私なりに纏めてみたいものかと考えて居ます。

最後に三翠化学会の皆様の健康と発展を心からお祈りする次第です。

北岸 確 三

研究回顧 わが建設の記

定年退職に際して

にでられぬのだと言われており結局私も結果的に大学の道をあるいてしまつたわけだ。ただこの勤めは戦争で学問から離れて私にとつて、その空白を埋め、研究の情熱に火をつけたようである。

戦後専門学校の教官充て、さそわれて松阪にありました三重青年師範学校の農産・食品加工の教授として赴任したので、その後の新制大学の発足にともない教育学部に移り、さらに農学部へ来ることになった訳です。当時農芸化学科は農産製造科として存在し、農産製造、醸造、畜産製造、化学教室の四つで構成され、それぞれの教官の充実ははかれておりました。私は農産製造教室で園芸利用学

縁

奈良 省 三

と水産製造学を担当するようになったわけだ。農産製造学科は三回卒の人から農芸化学科と名称を変更しましたが、当初は農産物の加工利用の理念をか

5月15日(日)

設立十周年総会と 記念祝賀パーティー

● 総会
 三重大学農学部
 午前十時から受付
 ● 祝賀パーティー
 三重県社会福祉会館
 (津駅から東へ徒歩約五分電通一
 三〇〇)

午後三時三十分から
 会費 七〇〇〇円

準備の都合がありますから同封の葉書で、四月末日までに、出欠のご返事を下さるようお願いいたします。

三重県支部設立総会も

準備の都合がありますから同封の葉書で、四月末日までに、出欠のご返事を下さるようお願いいたします。

準備の都合がありますから同封の葉書で、四月末日までに、出欠のご返事を下さるようお願いいたします。

滝、岩本両先生

叙勲の栄に輝く



岩本喜一

私の出会い

昭和二十五年の春、私は東京を去って滋賀県の草津町(今は市)に移りました。私の家は代々東京の下町、日本橋に住んでいました。もともと関東大震災後、日本橋を去って、滋賀県へ行くときは本郷に住んでいました。兎に角私の代になって、初めて都落ちをしたことになりました。その春、滋賀県に県立の農業短大が創立され、大学の時代の先生が先生が初代の学長に迎えられることになりました。そして私もお供をする事になったのです。その裏には私の居た理研の改組がありました。この新設の短大への赴任が、嶋林先生との出会いになるのです。思えば人間の出会い程、不思議なものはありません。この出会いが、その後の深い縁(えにし)につながるのですから、人生もまた不思議なものですね。私との出会いが、再度の三重大学の入学(前身の高等専門卒)、更に続いての京都大学の大学院への進学となるのです。少なくとも私の出会いは、その引金になっているのではないかと、私自身は思っています。「人生は出会いです」と言った作家がいま

すが、まことにそうだと思います。嶋林先生が大学院終了の春、昭和三十一年の春、私は三重大学に転じ、赴任することになりました。そして思いがけず、私の助手として嶋林先生も赴任することになりました。再度の出会いです。二人の赴任先は、三重大学農学部農芸化学科、生物化学講座でした。然しこの講座は、それまで空席でした。従って部屋はあっても、あるものは、実験台と机だけで、実験器材は硝子のかけら一つありませんでした。そんなところへ、私と現在の嶋林教授とはやって来たのです。

その春から二人での研究室づくりが始まりました。三重大学農学部の生物化学の講座づくりが、二人に課せられた仕事だったのです。今にして思えば、やりがいのある、人生において滅多に無い機会を与えられた訳です。私達二人は大変な幸運に恵まれたのです。

私の滋賀県在住は六年でした。六年後が恰度よいネ、とある先輩は言いました。私は凄然と、三重県にいるのもその位かな、と思つたものでした。ところが何とそれが十八年にもなつてしまいました。考えてみますと、私は、力量も無いくせに、自分の置かれた周囲を、何とか少しでも良くしたいと夢中になるくせがあったのです。先ず講座数をふやすことを考えました。東海地区の新制大学の農芸化学科で、講座数の増えたのは三重大学だけです。そんなことに夢中になり、次は大学院をつくることでした。そんなことに我を忘れていたうちに、歳月が流れてしまつた訳です。

私はまた良い同僚に恵まれま

した。部屋の人は勿論のこと科の人達にも恵まれました。そしてまた教え子にも恵まれました。十八年はまことに楽しく過ぎました。

昨年十一月叙勲の栄に浴しました。早稲、科の皆さんは御祝いの会を開いて下さいました。滝先生と二人、招かれて光栄の一夜を過ごした次第です。昔に変わらぬ温かい皆さんの情に感激いたしました。更に明けて一月の下旬、今度は私の部屋の

卒業生の皆さんが、御祝いの会を開いて下さいました。教え子の皆さんの話を聞いていて、教師としての最高に嬉しい、最高の感激に浸ることができました。人生において、これ程の感激の瞬間はないと痛感しました。考えてみますと、これはみな出会いなのです。お蔭さまで、私の人生は大変豊かなものとなりました。有難いと思つています。

また私は大変よい師に恵まれました。鈴木梅太郎先生、佐橋住一先生、塩入松三郎先生です。鈴木先生、塩入先生は天才でした。こういう先生方に接し得たことは無上の幸福でした。この様な先生方から、色々なことを学び得たことは、大変な幸運でした。尊い出会いでした。私の有機化学は佐橋先生の賜物です。研究に対する考え方、態度、み

んぶんの遺伝化学の端緒を開きました。ところが、イネの場合には、この領域の発展は見られませんでした。

同じようなことが、トウモロコシの場合にも繰り返されました。このトウモロコシが米に持ち込まれたのは一九〇九年で、事実の外観から *maize* と名づけられました。この *maize* 種は多方面の注目をひいて、胚乳の *starch* 性が指標となつて、遺伝研究の分野に大きな役割を演じました。ところが、ヨウ素反応によつてこの *starch* 種のデンブンがモチ性であることが確認されたのは一九二三年のことです。一三年の年月が必要でした。これに伴つて、この分野の研究がさらに発展してきたところへ、一九四三年に *T. J. Stebbins* によつて、トウモロコシのウルチデンブンの分別法が確立されました。これに引き続いて、ヨウ素反応の本態が解明されて、トウモロコシのデンブンのウルチ性、モチ性の分子レベルからの考察が可能になりました。機を逸せず、一九四三年には、G. E. Spague らがこの成果をトウモロコシのウルチ、モチの交雑の遺伝的導入



滝基次

ヨウ素反応をめぐって

デンブンにウルチ、モチの区別があるのは、イネ科植物の子実の胚乳と花粉に限られているようです。この判別にはヨウ素反応によるのが一番容易です。この反応の発見はずいぶん古く一八二四年のことです。このときはウルチデンブンを試料にしたのでしようか、ユメデンブンの *starch* の反応が記載されたのは一八六〇年です。メンデルの遺伝法則が再発見されたのは一九〇〇年ですが、これを追うようにして、一九〇二年に星野は、ヨウ素反応によつてイネのウルチ、モチの交雑からウルチ性の優性を明らかにして、で

文章になつてしまいました。叙勲に浴して、昔のことが次々に思い出されて、ついこんな

今は亡き老師を偲びつつ
25年目のクラス会

大5 水谷 栄三

三翠化学会の各会員は、五年目位のサイクルでクラス会を開いておられる様である。われわれ第五回卒業生も、昭和五十二年に二十五年目のクラス会を開いた。こういふ先生方に接し得たことは無上の幸福でした。この様な先生方から、色々なことを学び得たことは、大変な幸運でした。尊い出会いでした。私の有機化学は佐橋先生の賜物です。研究に対する考え方、態度、み

して、デンブンの遺伝化学の基礎を確立し、一九五二年には高アミロース トウモロコシの発見とともに、デンブン合成の遺伝的制御の可能性も期待できる段階になりました。

このように見えますと、わが国と米国で独立にデンブンの遺伝化学の展開があつてよきように思えます。ところが、わが国のイネについての研究は、時期的には早く着手されましたが、残念なことに見るべき展開もなく中断されてしまいました。これに反して、米国のトウモロコシの場合は、遅れて着手され、研究の初期こそ停滞のように見られましたが、デンブン化学上の画期的な発展に加速されて、大きな成果が得られました。まさに、これは、科学風土の違いが露呈している例でしょう。

わが国のデンブン化学の現状は世界的レベルであるといわれていますが、このデンブンの遺伝化学の分野の欠落は否定できません。すでに、国際稲研究所が可能なになりました。機を逸せず、一九四三年には、G. E. Spague らがこの成果をトウモロコシのウルチ、モチの交雑の遺伝的導入

あり三翠名簿やら勤務先に電話して転動先住所を聞くやらで、ともかく各位の賛同を得て、三重県長島町にある中部日本放送長島寮を知らぬ人の伝で拝借開催することが出来た。

前二十回の折は、恩師の方々にもご出席いただいた。省みてまさか愕然の思いがする。われわれが親しく懐かしんでおられた、また膝をまじえて話を聞いた、たまたま稲川教授、長瀬教授、田中教授、石川教授と、この僅か五年の年月で幽明境をわけることになつたとは夢想だにしなかつた事である。在りし日の恩師を偲び改めてクラス一同哀悼の意を表するものである。

さて、当日集合してくれたクラスメートの記念写真を紹介すると、前列右から、滝川、江、山田幸雄、芦田、岡田、後

列右から水谷、野瀬、山口、山田庄一、森田、板谷、植松、刀根、川部、神原、立花の諸兄である。また当日参加出来なかつたが、青森で活躍中の岡田、東京在住の加藤、佐野、全国の山林を歩き、百年先の美林を育てている蒲郡の黒野など不参加の理由と一緒に近況を知らせてくれ、皆で回顧して懐旧談に花を咲かせた。宿泊先の寮マスターの料理に舌鼓をうち、カラオケに日頃の修練ぶりを披露し、また刀根の謡曲の首吐朗々に度胆をぬかれ、なかなか楽し一夜であった。

五年後の再会を約し、一同別れを惜しみながら東西に別れたのである。

……一年遅れのクラス会記をみると、前列右から、滝川、江、山田幸雄、芦田、岡田、後

果を出す事が要求され、その上常に次期テーマを出していかなければならず、シリに火のついた研究連絡でアツという間に三十年が過ぎました。

振り返ってみると、一番長く研究したのが酸酵化学関係で、京大受託研究員五年を含めて十四年間、この間、世界で最初にメタノール資化性酵母を発見したり、世界で最初に合成高分子PVAの分解酵素の製造特許を出したり、食品保存料のデヒドロ酢酸を工業製品の防黴剤用途に振付け、年間十五億円の売り上げを出すなど、未だに微生物に

現在、白井松新薬に一年六カ月。入社早々生化学研究部長を命じられ、しかも六億から投資して生化学研究棟が与えられ、ウロウロしているのが現状です。昨年十一月二十三日に竣工した生化学棟の中にはP₈設備の遺伝



大5回クラス会の皆さん



大2回クラス会の皆さん

学教授・澤田、竹村商社社長・竹村、名張高校教諭・木根、深尾商店社長・深尾、橋本醸造社長・橋本見一、石原産業・橋本忠、三重県庁・近藤、筆者(服部)、三興製紙・鳥羽の各大兄。三五五集まる顔ぶれば、学生時代のままの者、すっかり白髪が増えた者、遠路を、又卒業以来初めて顔を合わせる者もあつたが、会場は二十数年前の学生時代の雰囲気である。

まず、幹事の簡単な挨拶の後乾杯、そして宴会に入る。それぞれの近況の報告では、各自が業界で中心をなしている年令だけに、苦労話の中にも豊かな経験と自信の程がうかがわれる。

滝先生の学究一途の円熟したお話しには、先生の御人格がにじみ出ており、感深いものであつた。久方振りに会つた、鳥羽、北

久方振りのクラス会が開催されたのは、昨年の七月四日である。今迄は何等かの理由を設けて殆んど毎年の様に開催されてい

たが、ここ二三年お互いの都合がつかず御無沙汰していた。同級の一人、筆者が長年の会社勤めをやめ、居酒屋を始めたので、嶋林、深尾両兄の連絡でその激励もかねて四日市駅前前の養老の滝(有限会社銀駒)に集合となった。

まず、出席者を写真で紹介すると、恩師滝先生を中心に前列左から、大阪化学振興KK工場長・筒井、河田飼料KK・足立、三重大学教授・嶋林、中列左から農林業自営・小林、米長商店社長・中川、恩師滝先生、ヤマモリ食品工業・川村、後列左から、宮川印刷・北沢、聖母女学院大

難や、リコンビネートなどした事がないので大変でしたが、これからの大変と大変と……しかし、他のテーマもHLA Iモノクロノール抗体の産生とか、新現臨床診断薬として酵素免疫分析キットの開発等々、今までに経験していない分野に挑戦中、これも若返りの一つとヤセガマと言つても、若い時の如く、頭に入らない事多く、日々消化不良の蓄積をやっています。

浅学非才の人間三十年の経験でさえ、農芸化学を専攻する者には前途洋々たる未来が待ちかまえています。小さく固まら

転々流転三十年

西川 英郎 (大1)

丁度、大学出て今年三十一年。パイオテクノロジーの時代と異なり、新制、旧制大学生が同時に卒業の上下不景気、それでも先生の肝入りでクラ化化粧品本舗中山太陽堂に入社出来たもの。翌年には不景気で銀行管理で首その後、京大大学院、井上皮革、三重大助手、日本合成化学工業、表題の如く転々流転。あげくの果てに、二十年勤務していたのかもしれない。パイ

され、現在、白井松新薬に勤務。五十の手習いで薬の研究。クラ化化粧品名をかえ、フルベール化粧品、井上皮革は倒産してなく、日本合成も縮小して全盛時の三分の一の人員になつていて、世の荒波をまともにかぶりながらも、一応は生化学系の開発に従事し、その間十二年間も三重と京大に席をおいて研究したのだから、まだ恵まれていたのかもしれない。パイ

究、合成高分子土壌改良剤の研究など当時としては最先端の仕事でした。それから皮革鞣製研究が三年、香粧品化学が二年、農薬が二年と農芸化学の各講座を転々、恩師、先輩、後輩、諸兄を尋ね、御指導頂きながら、なんの恩返しも出来ず、今日に至っている。

現在、白井松新薬に一年六カ月。入社早々生化学研究部長を命じられ、しかも六億から投資して生化学研究棟が与えられ、ウロウロしているのが現状です。昨年十一月二十三日に竣工した生化学棟の中にはP₈設備の遺伝

《文芸欄》

釣と川柳と...

専二回中北義郎 (伊勢工業高校)

一、青竹が釣竿だった少年期
生まれは伊勢。育ちも伊勢。伊勢に勤めて五十有余。生粋の伊勢っ子と言ふのであろうか。伊勢には大きな海がある。そして釣があった。釣を覚えたのはガキの頃だった。

二、釣り上手人と魚の知恵
「市場調査と商店経営」「魚場調査と釣り」とあてはめてみる。漫然と釣に行くと、時に釣れることもあるかも知れない。いつ出かけても釣れる。そんな釣をしたいと、私は思っている。その為には釣魚データが必要である。私は昭和三十年来、二十八年間、釣行の月日、旧暦、場所、時間、餌、釣果、備考がメモされている。

「市調調査と商店経営」「魚場調査と釣り」とあてはめてみる。漫然と釣に行くと、時に釣れることもあるかも知れない。いつ出かけても釣れる。そんな釣をしたいと、私は思っている。その為には釣魚データが必要である。私は昭和三十年来、二十八年間、釣行の月日、旧暦、場所、時間、餌、釣果、備考がメモされている。

三、細いテグスは強さ主張
昭和五十八年度の会費納入を願ひ致します。三翠化学会も十周年を迎え、諸活動もますます活発になろうとしております。皆様方から頂いております会費はこの原動力であります。誠に六年間振替口座番号 名古屋 九一五三四五

学科近況

今年度は修士六名(内女子一)名、学生二十四名(内女子六)名が三月二十五日に誕生し、新三翠化学会員として迎えることとなります。進路の内訳です。加えて「こうより」に対する御希望、御意見等何でも結構です。一つ、気楽に筆を執っていただき、投稿いただければ幸いです。

私共、農芸化学科の機関誌「こうより」は昭和三十四年から第一号を発行して以来、先輩の御努力と御支援のおかげで第二十六号を発行することとなりましてあります。

在学生にとりましては、先輩からの原稿、便り程興味深いものはありません。皆様方の近況、在学中の思い出、エピソード、加えて「こうより」に対する御希望、御意見等何でも結構です。一つ、気楽に筆を執っていただき、投稿いただければ幸いです。

同心からお祝い申し上げます。両先生とも、社をしのぐお元気で、子女教育に御活躍中でありませう。両先生の御発展と御健康をお祈り申し上げます。

○北岸三三先生、日本農学賞受賞決定
日本農学会最高の栄誉であります。日本農学賞昭和五十八年度受賞者の一人に土壌学・肥料学講座担当の北岸三三先生が選ばれました。両先生は、この御発展と御健康をお祈り申し上げます。

次に、学部、大学の近況についてであります。昨年八月までの状況は「三翠」第一五五号でお知らせしてありますので、それ以後について触れておきます。

農学科学部は化学科と社会科の二学科により構成され、学生定員はそれぞれ八十名、百四十名の計二百二十名であります。さらに、化学科十名、社会科十名、計二十名の計三十名の三年次編入が計画されております。

また、大学教育の社会への開放を推進するため、社会人五名程度の婦女子三名程度の枠で、共通一次試験を課さず且つ試験方法を配慮した特別選抜を行うこととしております。

農学科学部昆虫学講座の岸本良一先生の日本農学賞受賞が決定されました。両先生は、この御発展と御健康をお祈り申し上げます。

「三翠化学」を情報交換の場として活用して下さい。

会費納入のおねがい

昭和五十八年度の会費納入を願ひ致します。三翠化学会も十周年を迎え、諸活動もますます活発になろうとしております。皆様方から頂いております会費はこの原動力であります。誠に六年間振替口座番号 名古屋 九一五三四五

年費は一〇〇〇円です。会員の皆様には各自の納入状況を記入したカードを同封致しましたので、お確かめ下さい。

なお納入の際、振替用紙に「卒業回数」と「年度会費」を明記頂ければ幸いです。

既に、新聞、テレビ等を通して御存知かと思いますが、三重大大学の六番目の学部として、人文科学部の創設が認められました。これからの予算案および関係法案の成立により、新学部が正式に発足することになります。

この人文科学部は化学科と社会科の二学科により構成され、学生定員はそれぞれ八十名、百四十名の計二百二十名であります。さらに、化学科十名、社会科十名、計二十名の計三十名の三年次編入が計画されております。

また、大学教育の社会への開放を推進するため、社会人五名程度の婦女子三名程度の枠で、共通一次試験を課さず且つ試験方法を配慮した特別選抜を行うこととしております。

農学科学部昆虫学講座の岸本良一先生の日本農学賞受賞が決定されました。両先生は、この御発展と御健康をお祈り申し上げます。

「三翠化学」を情報交換の場として活用して下さい。

Table with 4 columns: 号数, 直径(mm), 引張強度(kg/本), 引張強度(kg/mm)

はじめに
近年、わが国の平均寿命は驚異的な伸びを示し、一九八一年には、女七九・一三才、男七三・七三才となり、事実上、世界一の長寿国となった。それ自体は大変に喜ばしいことであるが、人口構成の急速な高齢化は社会的な問題を提起しつつあり、たとえば、国民の健康問題一つをとっても、新しい視点が要求されようとしている。

現在、わが国の癌死亡は、年に一七万人余となり、心臓病、脳卒中を抜いて、死因の第一位にある。癌成因の八〇・九〇％は環境因子で、特に女性では六〇％、男性では四〇％以上が食餌あるいは栄養に関係があるとわがれている。

二、ヨーグルトの栄養効果
ヨーグルトは、完全食品といわれる牛乳を原料としているので、良質の蛋白質以外に、日本人に不足しやすいカルシウムやビタミンB1、B2、Aなどの給源としても優れている。

動物実験では、ヨーグルトの経口投与によって、癌細胞の増殖を抑制する効果も認められているが、その作用機序としては成分の直接的な働き以外に、腸内菌叢を介しての働きも考えられている。

四、ヨーグルトの血清コレステロール低下作用
マンラ(一九七七)は、アフリカのマサイ族の戦士に多量のヨーグルトを与えると、血清中のコレステロールが顕著に減少することを発見し、抗コレステロール因子の存在を推定した。

ヨーグルトと健康 大10 神辺 道雄

一、ヨーグルトとは
ヨーグルトの歴史は非常に古く、紀元前五千年頃に人類が最初の家畜として羊を飼いはじめた時期にさかのぼる。ブルガリア地方、東地中海沿岸地方が発祥地といわれ、現在でも住民の重要な食料の一つである。

最近になって、「食物-腸内菌叢-健康」の関係が究明されるようになり、また、成分の分別・分析方法や生命科学の新たな手法などの発達と相まって、ヨーグルトが健康食品として再び脚光を浴びようとしている。

健康な人の腸内には、一〇〇種類以上の細菌が存在し、特に、有用な菌と有害な菌とが一定のバランスを保っている。このような腸内菌叢は、食物、薬物、ストレス、気候、宿主の生理、感染、外来菌などによって如何が変化するか。

お知らせとおねがい

農芸化学科の教職員、卒業生、そして学生の三者を結ぶ懸橋として出発した「こうより」(紙綴り語源)第二十六号も先輩からの投稿がなく、寂しい限りであります。

「こうより」は昭和三十四年から第一号を発行して以来、先輩の御努力と御支援のおかげで第二十六号を発行することとなりましてあります。

在学生にとりましては、先輩からの原稿、便り程興味深いものはありません。皆様方の近況、在学中の思い出、エピソード、加えて「こうより」に対する御希望、御意見等何でも結構です。一つ、気楽に筆を執っていただき、投稿いただければ幸いです。

私共、農芸化学科の機関誌「こうより」は昭和三十四年から第一号を発行して以来、先輩の御努力と御支援のおかげで第二十六号を発行することとなりましてあります。

同心からお祝い申し上げます。両先生とも、社をしのぐお元気で、子女教育に御活躍中でありませう。両先生の御発展と御健康をお祈り申し上げます。

次に、学部、大学の近況についてであります。昨年八月までの状況は「三翠」第一五五号でお知らせしてありますので、それ以後について触れておきます。

農学科学部は化学科と社会科の二学科により構成され、学生定員はそれぞれ八十名、百四十名の計二百二十名であります。さらに、化学科十名、社会科十名、計二十名の計三十名の三年次編入が計画されております。

また、大学教育の社会への開放を推進するため、社会人五名程度の婦女子三名程度の枠で、共通一次試験を課さず且つ試験方法を配慮した特別選抜を行うこととしております。

農学科学部昆虫学講座の岸本良一先生の日本農学賞受賞が決定されました。両先生は、この御発展と御健康をお祈り申し上げます。

「三翠化学」を情報交換の場として活用して下さい。

原稿募集

会報「三翠化学」の充実をはかり、会員相互の連携・情報交換をより緊密にするため、原稿を募集しております。どんな原稿でも大歓迎です。積極的な投稿を是非お願いいたします。

「三翠化学」を情報交換の場として活用して下さい。

「三翠化学」を情報交換の場として活用して下さい。

「三翠化学」を情報交換の場として活用して下さい。

「三翠化学」を情報交換の場として活用して下さい。